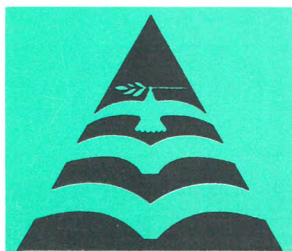


大学出版

'94 春

No. 21



大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses

大学出版部協会

大学出版21号 [Spring 1994] 目次

読書の周辺

三田の大教授たち

若林 真 1

シェイクスピア研究における

二つの伝統（イギリスとアメリカ）

草薙 太郎 5

日中大学出版の交流

中平千三郎 9

東京国際ブックフェア'94を終えて

小林 敏 11

ミツバチの四季（続）

田口迪太郎 12

大学出版部ニュース

新案内'94・1〜'94・3

19 14

表紙イラスト ヨースト・アマン『職人図鑑』より

大学出版部協会マーク・デザイン 道吉 剛

本冊子中の表示価格は税込みです

第15回（一九九三年度）日本生命財団出版助成図書

刊行期間 平成六年四月〜平成七年三月

①医療保険と年金保険―フランス社会保障制度における

自律と平等

北海道大学図書刊行会

加藤 智章（山形大学人文学部助教授）著

②Environmental Management of Groundwater Basin

（地下水盆の環境管理）

東海大学出版会

柴崎 達雄（水収支研究グループ代表）編

③秀吉権力の形成―書札礼・禁制・城郭政策

小林 清治（東北学院大学文学部助教授）著

④近代日本の学校と地域社会―村の子どもはどうか

土方 苑子（国立教育研究所教育政策部室長）著

⑤図説・藁の文化

宮崎 清（千葉大学工学部助教授）著 法政大学出版局

⑥祭礼文化史の研究

福原 敏男（国立歴史民俗博物館民俗研究部助手）著 法政大学出版局

⑦子守学校の実証的研究

長田 三男（早稲田大学教育学部助教授）著 早稲田大学出版部

⑧ハルマ辞書成立史の研究

松田 清（京都大学総合人間学部助教授）著 京都大学学術出版会

⑨近世沖縄の料理研究資料 宮良殿内・石垣殿内の膳符日記

金城須美子（琉球大学教育学部助教授）著 九州大学出版会

*日本生命財団は優れた研究成果でありながら出版の困難な学術専門書を対象に大学出版部協会加盟出版部に出版助成を行っている。（既刊一六七点）

三田の大教授たち

若林 真

(慶應義塾大学教授)

近ごろ自分の年齢が気にかかるようになった。現在の勤めが残すところ一年になったのだから、無理もない。体力の衰えは自然の理として諦めざるをえないと割りと達観しているものの、もしかして知力の衰えも進行しているのではないかと疑い出すと、心穏やかではない。日暮れて道遠しで、専攻の学問の分野でもしなければならぬことが山ほどあるのに、わずかなことしかなしえていない。情けないことだ。ほぼ四十も年齢の違うのが教室で現在指導している学生たちである。彼らの目に私がどのように見えているのかと思えばぐねると、急に自信がなくなる。彼らからして老人に見えるのは致し方ないけれども、学問の鬱然たる大家に見えるはずもないと思うと、やはり淋しい。

私が三田の学生だった頃の文学部には名物教授、大教授

がたくさんいた。西脇順三郎がいた、折口信夫がいた、奥野信太郎もいた。もっとも奥野先生などは失礼ながら休講の名人で、学匠というよりも市井の文人といった趣であったが、独特の風格、軽妙洒脱な味わいがありで、時たま聞かしてもらえる中国の艶笑譚などは実に楽しかった。

ところでこれらの大教授、名物教授たちの当時のお歳を推測してみると、現在の私よりお若かったのではないかと思う。つらつら反省してみると、今の私はとうていあのような濃密な存在感を学生たちに印象づけることができないと思う。それでは、私と同年配の同僚たちはどうか？

学識に不足はなく、学問的業績においても慶應にこの人ありと言われるような学者たちは数多存在しているけれども、先に挙げた大先生たちがお持ちになっていたような、貫禄といおうか存在の密度といおうか、そのようなものは残念ながらない。要するに人間がみな小粒なのである。しかし、これは個々の人物のせいというよりも、時代のせいなのだ、私は思う。

休講は決して褒めたことではないという前提で言うのだが、もしいま三田の教室で奥野信太郎先生のように派手に休講する教授がいたら、学生たちは決してその教授を容赦しないだろう。しかしこのことは、かならずしも学生たちが向学心に燃えていることを意味しない。学費を払い講義を聞く権利を有する者として、権利の侵害に憤慨する、そういういった心理的側面もあるような気もするのである。教授

がひそめている人間的魅力などを、今の学生はあまり重視しないのかもしれない。現代というドライで功利的で無個性的な世相の反映というべきか。

後世への証言として、私がお教えを受けた大教授たちがどのようにユニークであったかを素描しておこう。

後藤末雄先生といっても、今日では知る人はすくないであろうが、『中国思想のフランス的西漸』という比較文学、比較思想の名著の著者であり、若いときは谷崎潤一郎らの「第一次新潮」の同人として小説も書いたことのあるお方だ。先生は大学者ではあるが、義理にもフランス語の発音はきれいでないにもかかわらず、ご自身の発音は天下第一品と自負なさり、われわれ仏文学生はずいぶんしぼられたものだ。そしてフランス人などが訪ねてきたりすると、先生は開口一番「私は世界的に有名な学者であるが、あなたはごぞんじか？」などと堂々とおっしゃるのである。これにはわれわれも呆気にとられたものだけでも、先生の明治人の気骨が言わしめた言葉だったのだと思う。

また、ある日の折口信夫教授は、能面のような面持で教室の扉を開けてお入りになり、教卓を前にして着席なさる、間を置かず紫の袴姿の女子学生が盆に茶を乗せて運んでくる。先生はその茶を一口二口お口になさると、巻物状

の講義ノートを開き、黒板に大きな字で「風流」と書き、諸君はこの文字を「ふうりゅう」と発音するが、それは間違いで「ふりゅう」が正しい発音であるなどと、くぐもったお声でおっしゃる。それはまことに呪縛力のある秘教的な講義であった。今日三田の教授連の誰がこのような雰囲気をかもしだせるだろうか？ 往年の三田の折口門下生たちは教室のこうした雰囲気の中で、おのれの学問を練磨していったのであった。教室こそまさしく秘伝授受の場だったのである。

また、文学概論担当の西脇順三郎教授は、開口一番、文学概論なんてのはくだらない学問だ、ドイツ人は頭が悪いからこんなものを考え出す、ぶぜんとした表情でそうおっしゃると、詩の創造とは言葉によってもっとも遠いもの相互間の関係をつけることだという、西脇詩論といおうかシュルレアリスム詩論といおうか、ともかくわれわれ無知な学生どもの意表をつく文学論がえんえんと展開され、あるときはアリストテレス、あるときはボードレル、あるときはピカソの話となり、講義の奇想天外な進展に、学生はただただ目を見張るのであった。

西脇先生は講義中にご自分の詩について語ることはまずなかったけれども、先生の越後弁なまりのお声のなかに、われわれは先生の詩の朗読を聞いていたのである。三田山上の晴天の日の講義の際には、

(覆された寶石)のやうな朝
何人か戸口にて誰かとささやく
それは神の生誕の日。

「天気」

また雨天の日の講義の際には、

南風は柔い女神をもたらしした。

青銅をぬらしした、噴水をぬらしした、

ツバメの羽と黄金の毛をぬらしした、

潮をぬらし、砂をぬらし、魚をぬらしした。

静かに寺院と風呂場と劇場をぬらしした、

この静かな柔い女神の行列が

私の舌をぬらしした。

「雨」

以上言及した大家たちはいずれもわれわれの学生時代の
正教授たちであるけれども、ここで是非とも井筒俊彦助
教授のことを語らなければなるまい。井筒先生が亡くなら
れて早くも一年になる。『井筒俊彦著作集』(中央公論社)

も完結し、人々は今更のように井筒先生の存在の偉大さを
認識しつつある。学識は古今東西の思想や文学に及び、世
界の三十数か国の古今の言語に通じていた井筒先生はまさ

しく一個の知的モンスターであった。私の三田在学中、井
筒助教授の講義ほど精神の緊張を強い、知的興奮を誘発し
たものはなかった。私は先生の言語学概論とロシア文学の
講義を受講していたけれども、なかならず前者ほど衝迫力
の大きかった講義を知らない。

私より四年ばかり下の江藤淳氏は井筒先生の言語学概論
の筆記ノートにふれて、

「このノートは、日本中で、いや世界中で、井筒先生の
講義を聴講した者だけに与えられる宝物である。だからこ
そ大切に保存し、一生読み返して自分の思索の指針としな
ければならないと、そのとき私は固く心に決めたのであ
る」と回顧している。

また、私の一年下の仏文科女子学生だった詩人の村上博
子さんは「言語学概論を私は卒業まで三年間聴き、なおあ
きらめきれないであと二年間聴講した」と証言している
が、その村上さんは四年間の講義記録、井筒先生のお話に
なった口調まで正確に書きとどめた記録を、大切に保管し
ているとのことである。

最後に、先生の愛弟子で、現東京外語大教授、牧野信也
氏の告白を聞こう。

「今にして思えば、この講義は言語学概論ではなく、む
しろ哲学的深層意味論序説とでもいえるすばらしい内容の
ものであった。この時間に出席した人は誰でもそれを実感

することができたのであるが、私もこの講義の内容に完全に圧倒され、その度毎に強く深い感動を受けて三田の山を下り、また次の水曜日が待遠しくてならなかった。それ以後、私は日本でも外国でもこれ以上の講義を聴いたことは一度もない」

ことほどきように、井筒先生の講義には、魅力、いやむしろ魔力があったのである。その強烈な精神の劇の場が、三田の現在の第一校舎の一〇二番教室、時間は水曜日午前の二時限であった。朝寝坊の怠け学生でも、この日ばかりは早々と起き出して学校へ出かけたのである。そうでもしなければ、教室はたちまち満席になり、後列に立たざるをえなくなったからだ。

先生はいつもハイカラーで太いストライプのワイシャツをお召しになり、空を舞う蝶さながらの大きな蝶ネクタイをつけ、ネクタイピンで襟元を留め、きまって縁無し眼鏡をかけ、なかなかのダンディであった。

司馬遼太郎氏が形容するところの「低めの、絹糸のような手ざわりの声で」井筒先生が講義をおはじめになる。学生たちはいっせいにノートにペンや鉛筆を走らせる。先生は人名、知名、書名、引用文を原語のまま黒板にお書きになる。英語、フランス語、ドイツ語ならいざ知らず、学習したことのない言語となるとそうすらすらは写せない。それがギリシヤ語やロシア語となると、青息吐息である。

ましてやアラビヤ語だのなんだのとなるともうお手上げである。あげくの果てにみなは長嘆息する仕儀に相成るのであったが、それでもわれわれは懸命にノートへ文字を走らせたものである。

かくして私にも、「宝物のような」ノートが残されているけれども、黄ばんできた横野の大学ノートをいま開いて見ると、井筒先生の言語哲学の真髓が息もつかせず速射砲弾のように開陳されていて、それが後年の先生の不朽の名著『意識と本質』を準備する講義であったことがよくわかる。

昨年一月七日に亡くなられた先生の遺著『意識の形而上学』のあとがきに豊子夫人はこう記している。

「今年の春三月に完成させる筈のその第一回の論文を、彼は彼の死ぬその日、一月七日の午後から書き始めようとしていた。ノートとテキストを積み上げ、万年筆も二本、机上に選んであった。朝の七時に寝に就き、就寝中、九時過ぎに意識を失い、彼の現意識はそのまま回復することはなかった。

(例によって)最初のページの言葉が押さえきれない程の力で彼の意識に思い浮び、……かつは消えかつは結ぶうたかたのコトバの流れを作りつつあったとき、一瞬の衝撃と共に彼は現意識を失った。」

まことに井筒先生こそ不世出の天才であった。

シェイクスピア研究における

二つの伝統（イギリスとアメリカ）

草薙太郎

（富山大学助教授）

シェイクスピア研究のイギリス的な方法とアメリカ的な方法を比較するとなると、どうしても大英帝国というものを考えざるを得なくなる。

イギリスの伝統的なシェイクスピア批評を代表するA・C・ブラッドレーの考え方ひとつをとっても、その考えの中心には、多様な考え方を寛容の精神で受け入れつつも、個人の意志と道徳意識を中心にした強固な自信が感じられる。それは多様な宗派を受け入れつつも、英国教会で精神的なまとまりを見せ、個人の意志と（独善的な？）道徳意識で七つの海を支配した大英帝国の反映ではなからうか。

一方、アメリカ合衆国は、多様な考え方が多様なままに、ぶつかりあうように混在している。全体として、どこかピューリタンのともいえる禁欲的な傾向は感じられる。同時に、きわめてラディカルな解放をとらえる傾向も存在

している。

シェイクスピアという劇作家の詩句をどうとらえるかというだけの問題で、イギリス的考え方とは何か、アメリカ的考え方とは何かを概観するという、壮大な試みも可能になる。それが、シェイクスピアの才能の大きさなのではなからうか。

具体的に例をあげて考えてみよう。

シェイクスピアには『リチャード二世』という作品があつて、その中でリチャード二世が退位させられる場面が有名である。

即位の儀式というものはあつても、退位の儀式というものはめつたにあるものではない。

王が王でなくなるという儀式の中で、リチャード二世は鏡を持ってこさせ、それを粉々にくだいてしまう。

自己の存在がおびやかされたとき、人間が何を思うかを、「儀式」の形を借りて表現したものと考えていいであらう。

自己消滅の儀式とでもいうべき表現を、ほとんど理解しないアメリカの博士論文が一方で存在する。UMIで入手できるアメリカの博士論文は、常識的で退屈であるという悪評をきく。その「常識的な」アメリカの博士論文が自己消滅の儀式を理解しない場合が多いとしたら、そのことはアメリカ的な考え方で自己消滅の儀式を受け入れにくいところがあると考えてもいいのではなからうか。リチャード

二世を退位させる側の陰謀に注目するものがアメリカの博士論文では多い。

アメリカの博士論文では、リチャード二世を退位させたボーリングブルックという人物の責任追及まで行われる。

ボーリングブルックは、リチャード二世を退位させ、ヘンリー四世として王位につく。そして、さらに『ヘンリー四世』第一部、第二部という作品にも登場する。

それを、まるでノリエガ將軍をアメリカ政府が追いかけたように、ボーリングブルックの政治的・道義的責任追及の観点で追いかけるアメリカの博士論文は多い。

『リチャード二世』は先述のような退位の儀式が印象的であり、『ヘンリー四世』第一部、第二部では、ヘンリー四世となったボーリングブルックは、むしろ父親としての役割が強調されているというのがイギリス的伝統に立つ見方ではないかと思われる。

こうしたイギリスとアメリカの傾向の違いの本質は、自己主張の意味の違いから来ているのではなからうか。

アメリカの風土の中で、自己主張をやめたら、それはそのまま完全な敗北を意味する。少なくともこれまでの歴史の中ではそうであった。

一番自己主張をしいはずの王様が退位させられる場面が印象的で美しい芸術に高められるところにそのことがよく現れている。王様が退位させられたからといって、国家が消滅するわけでもなければ、歴史とともに古い英国の

慣習がたちまちに滅亡するわけでもない。

一方、ピルグリムファーザーズ以来、アメリカの建国の歴史をさかのぼれば、アメリカのリーダーが決して妥協できない立場にいたことは明かである。征服意欲と征服を正当化し征服地の秩序を維持する禁欲的なモラルがこわれたら、アメリカの地を征服してできた国は消滅せざるを得ない。

つまり英国はリチャード二世が退位させられることに興味を持ち、アメリカは、ボーリングブルックがリチャード二世を退位させたことに興味を持つ。英国は、受身の立場に同情と関心を示し、アメリカは能動でしかものを考えにくい面があるのではなからうか。

リチャード二世が退位させられる場面がおめあてであったのか、エリザベス一世に対して反乱をくだしたエセックス伯爵の一味の者たちは、わざわざ金を払ってシェイクスピアの劇団に『リチャード二世』の上演を所望している。

シェイクスピア時代の英国の面白さは、英国だからといって、すべてが受身一辺倒ではなく、能動的にクーデターをおこす人々もいたということである。

シェイクスピア時代、すでにピューリタンの勢力のはじめていた。やがて、クロムウェルの清教徒革命をむかえることになる。アメリカが独立し、大英帝国が確立するまでは、イギリスとアメリカという分け方をはっきりいう

ことはできない。

後に大英帝国が成立し、英国教会を中心として少数の他の宗派も認めるような政治的精神的風土が確立するまでは「イギリス的考え方」が想定できるとは思えない。さらに、英国に代わってテクノロジーと経済力を背景に、アメリカが世界一の強国となるまで、少なくともシェイクスピア批評といった極めて精神的文化的領域において「アメリカ的考え方」が問題になるとは思えない。

その意味では、まだ「イギリス的考え方」も「アメリカ的考え方」も確立していなかった位置にシェイクスピアの作品はある。

「イギリス的考え方」でシェイクスピアを見るべきか。「アメリカ的考え方」でシェイクスピアを見るべきか。山高帽をかぶった英国紳士が脚を神経質にかくした婦人をエスコートする世界の延長にシェイクスピアがあるのか、あるいはシェイクスピアにはアメリカの黒人と多国籍の太腿をあらわにした女性がからみあう世界に通じるものがあるのか。

こうした問いは、シェイクスピアの位置を正確に把握すれば、すべてピント外れということになる。しかし四百年前のことがらを直接に正確にとらえる方法はタイムマシンでもない限り考えられない。ピント外れの問いをたどってゆくほかにない。

具体的に『オセロ』を例にとりて考えてみよう。

オセロ將軍は、色が黒いといながらもイギリス的な伝統に立つ演出では、大英帝国の海軍士官さながらの堂々たる英国紳士である。それが脚を神経質にかくしたヴィクトリア朝貴婦人のデズデモナへの不倫の疑いに、失神したり、ほほをなぐりつけたり、はてはベッドで首をしめ、殺したりすることになる。

海軍士官の制服を着た英国紳士が失神してひっくりかえる滑稽さは、イギリス的な伝統に立つ演出で、観客にわりきれない思いをいだかせてきた。それに比べれば、アメリカの黒人差別を演出のテーマにすえ、おりに入れられた獣の動きをするローレンス・オリビエがオセロを演じる映画の方が、少なくとも観客にわりきれぬ思いをいだかせることはない。

どちらの演出が正しいのか。

シェイクスピア時代には、大英帝国の威信は存在しなかったのだからオセロに大英帝国の海軍士官の制服を着せることは適当ではない。一方で、黒人差別に抗議する運動が力を持っていたわけでもないのだからオセロがおりに入れられた獣の動きをするのも、当時のシェイクスピア作品の位置を正確に伝えることにはならない。

ただ、シェイクスピア時代の軍人の概念と大英帝国の海軍士官が無縁であるはずはなく、当時の人種差別意識とアメリカの人種差別につながりがないわけではない。それをどう考えればいいのか。

『オセロ』の例もまた受動と能動ということで理解できるように思われる。大英帝国を経たあとのイギリス的な伝統に立つ演出では、結局、国家が主体であり、たとえ將軍でも、人間は国家に対して受動的な立場をとらざるを得ないのでなかろうか。一方、アメリカは、あらゆることについて能動的であることが期待され、受動的な行動も認識も許されない国柄である。

ここで受動の英国、能動のアメリカと決めつけてしまいう前に、考えるべきことはヨーロッパ大陸のことである。寛容な英国教会を奉じ受動的な個人を大英帝国が支配するイギリスと、すべての行動に能動的であることを期待しつつ、それがゆえに、ぎりぎりのところで自由な社会を統一する強烈な国家意識を、大英帝国以上に持つアメリカは、ともにヨーロッパ大陸の文化の影を大きくひきずっている。

神に対する極端なまでの受動的態度と、神の意を受けた人間の極端なまでの能動的態度がキリスト教の一般的な特徴である。科学法則に対して極端に受動的な態度をとり、科学技術を使った仕事に対して常に能動的にとりくむことを期待されるのが現代人である。精神分析、マルキシズム、フェミニズムといった観点のシェイクスピア批評は、まとめれば極端な受動と能動との間に立たされた人間に注目するものといえる。そのすべてがヨーロッパ大陸に端を発し、英国で色づけされ、アメリカで物質的な拡大をさ

れ、同時に英国色を薄められて、むしろヨーロッパ大陸に近い様相をおびている。

アメリカが英国よりヨーロッパ大陸に近いことはシェイクスピアの精神分析批評がさかんなことでもよくわかる。それも人間関係に着目したイギリスのものとは違って、個人の性欲そのものにかかわるものが多い。イギリスが恋愛そのものに興味を示すのに対して、アメリカは恋愛を効果的に演出する技術に着目する。ギリシャ、ローマの古典文化にあこがれるのは英米ともに同じものの、大英帝国を意識しない分、ローマ帝国へのあこがれが、直接的にアメリカのシェイクスピア批評に感じられる。自由と民主主義をかかげた理想を求める新しい国の仮面の下に、ローマ帝国の奴隸制を含めたヨーロッパ大陸のあらゆる政治的、経済的、精神的矛盾をアメリカは引き継いでいる。

シェイクスピアの作品を仲立ちに、そうしたアメリカの矛盾と、大英帝国の矛盾とをつきあわせることは、シェイクスピア時代のシェイクスピアを正確に把握する道であり、同時に、現代人の生き方をさぐる道でもある。

日中大学出版の交流

中平 千三郎

(東京大学出版会顧問)

中国国際文化交流中心(センター)の邀請を受けて、昨年十月二十日から十一月二日まで訪中した。その目的は、北京大学出版社から拙著『出版千凡録』の中文版が刊行された機会に、広く中国各地の大学出版部との交流を深めることにあつた。日程の都合で、北京では北京大学、人民大学、航空航天大学、大連では大連理工大学、上海では華東師範大学の各大学を訪問して懇談した。大学出版の国際交流という見地から、ごく簡単に報告しておきたい。

《中文版のまえがき》

北京大学出版社の前社長麻子英先生が、東京大学出版会創立四十周年に寄せられた祝辞の「筆下春秋月、耕耘四十年」の中に「日中両国大学出版社の友好提携の幕は一九八一年九月、東京大学出版会の中平千三郎常務理事(大学出版部協会幹事長)が主導された北京とハルピンにおける日本大学出版物展覧会によって切つて落とされました」とあります。小生はその前一九七九年に麻子英先生にお目にかかっています。以来二人の交友は東京大学出版会と北京大学出版社の関係から両国の大学出版部協会の交流へと発展

し、お互いの強い信頼にもとづく友情を深めて今日にいたりました。その結果、私どもの同僚石井和夫氏の『大学出版の日々』につづいて小生の『出版千凡録』が中文発行の榮譽をうけることになったのです。麻子英先生の友情、加えて現在の北京大学出版社社長彭松建先生のご好意に感謝するものであります。

本書『出版千凡録』の千凡とは(あとがきにありますように)小生の筆名です。中国の読者に文字の解説をするのはいささか恐縮ですが、凡という文字は風をはらむ帆の象形で、風がたまねく吹きわたるところから、すべて、皆、おしなべて、大概の意を表わす。語意としては、しめ合計つね常道、なみ普通等に転化して、非凡平凡とも熟語しています。その本の要領や方針をかけたものを凡例ということもよく目にするところでしょう。千は数の多いことですから、千凡という言葉はなくても『出版千凡録』とは、出版に関するいろいろなことがあれこれ一通り簡単に書いてあると思つてくだされば幸です。現代日本の出版に関する諸問題をとりあげ解説し報道しているのです。その内容はほぼ四百項目になります。事項人名の索引や年表等もあればよいのですが、なんといつても目次を省略したのが失敗です。著者として読者の皆様に深くお詫びするところです。

筆者は本文にもふれていますように一九三二年から一九四六年まで十五年間中国で育ち学んできました。ふたたび



北京にて（1993年10月21日）

中国の大地をふんだのは一九七八年の国慶節でした。その後十年間は毎年一度訪中いたしました。その都度上海が、青島が、旅順が思い出の故郷となつていくのです。今回本書の出版を期して六年ぶりに訪中することが出来ます。これも麻先生、彭先生はじめ北京大学

出版社の皆様のご好意によるものとおもっております。今年小生は古稀をむかえました。『出版千凡録』一本を携えて、北京、天津、上海の三直轄市をはじめ全国十九省、三自治区に存在する中国大学出版社協会加盟の九十三大学出版社を各地にたずねて出版の仲間として日中文化交流の実践にあたるのが出来ればとお願いいたしております。その節はよろしくとお願い申し上げて、中文書のまえがきといたします。最後に翻訳にあたらされました張貴来先生はじめ各位のご努力に深甚の謝意を表明いたします。謝々。』

中国は北京、天津、上海の三市、二十二省、五自治区の三十地区に区分されている。全国で大学は一〇九六校を数

えるが、大学出版社は海南、青海の二省と、西藏、寧夏の二自治区を除く各地区にあり、東北、華北、華東、中南、西北、西南の六区に分けて地区ごとに協会を組織している。全国六区全計九十三校が現在の中国大学出版社協会の構成メンバーである。主要な出版社は中国出版工作者協会にも加入している。この九十三大学出版社のすべてに中文版『出版千凡録』が各一部ずつ配布された。各出版社の運営活動に役立つことである。著者としては望外の光栄である。さらにこの三月、桂林市で開催される中国大学出版社の全国大会で、日本語版の『出版千凡録』を贈呈することになっている。

本年一月末幕張メッセで開催された東京国際ブックフェア'94に、日本は大学出版社協会のもとに全二十校が参加している。アメリカはAUPGとして、MIT、ハーバード、シカゴ、プリンストン、エール、カリフォルニアの六校、中国は、中国出版対外貿易總公司の斡旋で北京大学出版社のみが単身参加し、日本在留の編集者周女史ともども工作順利。韓国は大韓出版文化協会は出品しても、大学出版社は出品していない。ちなみに韓国は全国一〇九大学のうち六十三校が大学出版社協会を組織している。大学出版社は出版文化協会に所属していないからか今回は一校も参加していないのは残念である。会場では、各国大学出版社の交流がはかられたが、大学出版社を主体とした展示会が世界各国各地で継続開催されることが望ましい。

東京国際ブックフェア'94を終えて

(1月27日～1月30日) 於・幕張メッセ

小林 敏

(慶應通信)

東西冷戦が終結して久しい今日、地球的利益の実現という視座のもとで環境問題が声高に叫ばれている。また、国際家族年とされた本年は、民族、イデオロギーの垣根を超えた相互理解の要請のもと「地球家族」なる考え方を理解せしめようと、各方面での啓蒙、努力は実に見張るものがある。

しかし、反面で地球の一部に於いて今なおくすぶり続ける部族闘争や宗教戦争が潜伏化の傾向を見せている現実には、国家間の人間相互の理解という観点から考えれば、さらに深刻化の様相を呈していると言えなくもない。

このような様々な表情を見せる国際社会を背景に据えながら、東京国際ブックフェア'94は一月二十七日から四日間の日程で開催された。わが大学出版部協会は「大学と社会を結ぶ知のネットワーク」のスローガンをそのままに、日本の学術文化というものが、世界に果たしうる未知なる可能性をもとめて出展した。

今回のフェアは、前半の二日間を版權トレード専用とし、一般の入場を許可しない方式を採用した。これにより、

来場者の目的意識はより明確化されるという効果を見込めることである。初日は幹事長をはじめとする各大学出版部を代表する顔が揃う中、オープニング・セレモニーを経て一七一名のブース来場者数を記録した。アジア諸国の来訪者が目立ったのは、わが協会のスローガンでもある「知のネットワーク」がアジアに於いて理解されようとしている証なのかもしれない。協会の活動の詳細を綴った『大学出版』のバックナンバー無償配布が好評を博していた。

三日目には一般入場を開始。この日は前日より降り続いた雪により、来場者の出足の遅れが懸念されたが、杞憂であった。わが協会ブースは多数の来場者で賑わい、七三六名の来場者数を記録した。本を見つめる真剣なまなざしの一人一人を見てみると、世にいう活字ばなれ現象などは夢であるかのような錯覚を覚えてしまう。協会の小冊子『大学出版部協会三十年の歩み』も『総合図書目録』も四日目に時間を残して底をついた。我々の良書に賭ける情熱が世界の人々に理解されるものと信じたい。人間に英知というものがある限り、出版は普遍的なものとしてその姿を残す筈である。私はこのフェアでそのことを確信した。



ミツバチの四季（続）

田口迪太郎
（大学出版部協会顧問）

春爛漫

四季のきわだつ日本で、私たちは季節の移ろいに敏感であるが、とりわけ、桜がいつ咲きはじめるかは気になるところである。

例年三月にはいると、気象庁は各地のソメイヨシノの開花予想日を発表する。三月中旬ころ、南九州に上陸した桜前線は、一カ月以上もかけてゆっくりと北上し、四月下旬ころには北海道に到達する。東京での開花は三月下旬から四月上旬。上野の山の花見客のにぎわいが報じられて、世の中なにかと浮きうきするのは毎年のことであるが、長い冬をしのいできたミツバチにとっては、人間以上にまちどおしい桜前線であろう。

立春のころ、巣箱のふたをそつと開けてみると、冬の間小さくまとまっていたハチの集団は、かなりゆるんでひろがっている。中央部では、産みつけられた卵が、蛆からサナギにまで成長して、産毛の生えた新生児もいくらか仲間にくわわっている。前回述べたように、群のなかに一匹だけいる女王蜂は、最盛期には日に二千個もの卵を産む能力をもっているが、早春の産卵はひかえめである。気候の進

み具合、外からの蜜の入り加減、働蜂の育児能力など、環境条件に精妙に適応しながら産卵を調整しているが、桜の咲くころには、勢いのいい群では、二万匹くらいにまで増えて巣箱いっぱいになっている。そして晩春にかけては、加速度的に増えて、数万匹の大群になるのである。

活動全開

日中の気温が二十五度くらいになると、蜂は狂ったように働きまくる。夜明けを待ちかねて飛びだした蜂たちは、蜜で腹をはち切れんばかりにふくらませて帰ってくる。巣箱のそばの低い位置から、青い空を仰いでじつと見つめてみると、無数の蜂が、降りそそぐように一直線に、巣門めがけて帰ってくる。養蜂家はこの状況を「流蜜」とよんでいるが、野山に咲く花との間にセットされた管をとおして、巣箱に多量の蜜が流れ込んでくる感じをみごとにあらわしていてもいい。

桜につづいて、菜の花、レンゲ、ニセアカシヤ、ミカンなどが、ふんだんに花蜜と花粉を提供してくれる。中春から初夏にかけての四月、五月の二カ月間に、蜂たちは、およそ一年中の生産活動の大半をこなしてしまうといってもいいだろう。食餌の採集だけではない。増えつづける蜂の育児室とハチミツの貯蔵庫を確保するために、みずから分泌する白い蠟で、いわゆる蜂の巣型の六角柱の巣房を、増築し、新築する。この中で、働蜂が集めてきた花蜜は、醸成されてハチミツになり、育児圏をつつみかこむように巣

の周辺部に蓄えられていくのである。

ホビー養蜂家の活躍もここで最高に白熱する。眠い目をこすりながら未明に起きだして、待望のハチミツの採収にとりかかる。巣箱からずっしりと手応えのある重い巣枠をおもむろにとりだして、幼虫を痛めないように用心しながら、遠心分離機にかけて蜜を採る。澄んだ琥珀色のハチミツが、分離機の蛇口から流れ出て、みるみる器を満たしていくときの感動と陶酔。天空ではヒバリがさえずり、遠くからカッコウの鳴き声も聞こえてくる。青葉若葉にふりそぐ日の光は柔らかく温かい。まことに桃源郷とはこのような情景をよぶのであろうか。

結婚飛行

ところで、ミツバチの集団にとって、もっともたいせつな仕事は、実はこれからである。

気温が高まり、働蜂の活動が最高潮にたったところ、目の大きな雄蜂が巣を出入りするようになる。それにやや遅れて、巣のなかでは、次の代の女王の育成がはじまっている。体の大きい女王蜂を育てるためには、ふつうの六角柱の巣とはべつの、小指の先ほどの落花生の殻に似た巣房が用意される。そして、このなかに産み落とされた卵が孵化すると、とくべつの餌があたえられて、働蜂に育つ卵とまったく同じ卵から、体重が三倍もある女王蜂として羽化するのである。この餌が、強壯剤として人間の世界でも珍重されているロイヤルゼリー(王乳)である。

それはともかくとして、女王にふさわしく、とくべつに育てあげられた処女王蜂が、真の「女王蜂」になるためには、空中での結婚式をすませなければならない。生まれ出て一週間くらいたった処女王蜂は、大空にむかって飛び出し、雄蜂と交尾を果たして、巣箱に帰って産卵をはじめるのである。これまでこの結婚の儀式については、謎にみちたミツバチの生活のなかでも、とりわけ不思議な行動として、幻想的に脚色されてさまざまに語られてきた。しかし近年になって、雄蜂が群れをなして飛び交いながら処女王蜂を待ちうける、デートの場所が各地で特定されるようになった。そればかりではない。飛行中の一匹の処女王蜂を高速で追跡する雄蜂集団のなかで、ついに花婿の栄冠を手にした一匹の英雄が、交尾を果した瞬間に即死して墜落する衝撃的な情景が、ビデオカメラによって克明に捉えられたのである。映像を介してではあるが、私たちもこの感動と戦慄のドラマを目撃することができるのである。

巣分かれのこと、情報交換のことなど、ミツバチの世界では好奇心をそそられる話題はつきないが、与えられた紙数もつきたし、ホビー養蜂家の分をこえることでもあるので、ミツバチに興味をいだかれたかたには、手に入り易く、すぐれた、つぎの本をお勧めして責を果たしたい。

酒井哲夫編『ミツバチのはなし』技報堂出版、一九九二
坂上昭一著『ミツバチの世界』岩波新書、一九八三

北海道大学図書刊行会

▼一九九三年の北海道は二度にわたって大地震に襲われた。一月一日の釧路沖地震と七月一日二二時一七分に起き二二一人の死者・行方不明者をだした北海道南西沖地震である。島村・森谷著『北海道の地震』（一八五四円）は「地震のデパート」と言われる北海道で初めての普及書。この一冊で北海道の地震の

全てがわかると好評である。

▼一九九三年は三九年ぶりという記録的冷夏による大凶作のため二百万トンのコメの輸入を決定した年でもあった。大川隆著『北海道の動気候』（三五〇二円）は北海道特有の気候を具体的に解説した本として読まれており、臼井・三島編著『米流通・管理制度の比較研究』（三九四円）と臼井編『大規模稲作地帯の農業再編』も時宜を得た企画として関係者の関心が高い。

聖学院大学出版会

▼当出版会は聖学院大学総合研究所に所属しているが、ここでは共同研究「デモクラシーの研究」という会を開催している。

▼最近の研究発表を紹介すると第10回「ロシアにおけるデモクラシーの可能性」（霜田美樹雄・松井弘明）第11回「国体とデモクラシー」（吉田博司）第12回「ドイツにおけるデモクラシー

思想——イェリネックを中心として」（初宿正典）第13回「中東におけるデモクラシーの可能性」（富田広士）第14回「イギリス・デモクラシーとピューリタニズム——A・D・リンゼイの思想をめぐって」（永岡薫）である。

▼内外の、また研究分野の違った先生方の参加を得て、研究発表後の会食をはさんだ一時間半ほどの討論も興味味きないものがあり、なんとかいっつの日か、単行本化したいと考えている。

大学出版部ニュース

慶應通信

▼木村弘之亮著『多国籍企業税法—移転価格の法理—』（慶應義塾大学法学研究会叢書・A5判五〇〇ページ・七五一九円・発売・慶應通信）

本書は、「独立企業間価格の実体的原則」をはじめ、「移転価格の審査に関する一般原則」および「特殊原則」を明らかにしている。これらの諸原則は、

移転価格税制の適用について、国際的に合意が成立しあるいは承認された基準を提示しており、その適用と解釈の有効なガイドラインを提供している。本書にはさらに「OECD租税委員会の報告書」「移転価格に関するドイツ行政原則」「アメリカの移転価格税制」も収録されており、「移転価格の法理」に関する学術書であるが、それだけではなく、広く実務家にとって得るところが多い実用書でもある。

産能大学出版部

▼全世界で最も多く読まれている英国の作家・サマセット・モームの愛読者が、その作品の中から人生の知恵、警句、人生の喜びと楽しみについて語った文章を、精選して編んだ人生哲学のアンソロジー『上出来の人生だが……』（森村稔編著）が刊行された。日本の読者に、豊かな人生のヒントを与える書と

なるだろう。

▼世界的な企業会計監査法人のアーサーアンダーセンが、未来志向の企業のために構築した書『リエンジニアリングのための業績評価基準』が売れている。生産の側から消費の側へマーケットの主役の座が移動するにつれてビジネスの世界は真に革新的なコンセプトが求められる。それがリエンジニアリングだ、本書はその一角を受けもつ、なくてはならない一冊であろう。

玉川大学出版部

▼新堀通也編『大学評価―理論的考察と事例』(九二七〇円)
大学の活性化、教育、研究の向上をもたらすために多くの「大学評価事例」を提示し、実効ある具体化のための「大学評価」のあり方を考察している。
▼シロトニック&グッドラッド編・中留武昭監訳『学校と大学のパートナーシップ―理論と実

践』(五六六五円)

アメリカにおける学校と大学との連携関係のノウ・ハウとその理論的基礎を紹介。
▼岡田渥美編『老いと死―人間形成論的考察―』(七六三二円)

ライフサイクルの最終局面で直面せざるを得ない「老いと死」を起点にして、人間らしく在ること、人間らしく生きることの意味を捉える試み。教育の理論に新領域を加え、生への憧れ、勇気、信頼を甦らせる。

中央大学出版部

▼後藤弘樹著『マーク・トウェインのミズーリ方言の研究』(定価四二二〇円)

マーク・トウェインの三編の代表作品トムソーヤの冒険、ミンシッピー河の生活、ハックルベリーフィンの冒険からその話し言葉を言葉素材に、音韻構成、文法構造、語彙語法の観点で分類整理した英語の方言の文法書。

▼中川洋一郎著『フランス金融史研究―成長金融の欠如―』(定価三九一四円)

今日のフランス経済の特徴について「競争力の欠如」とか「構造的脆弱性」などと規定されるが、マクロ的な統計からの「結果」が語られるのみでその根本的な原因は追求されないままとされている。本書はその原因を追究し、フランス金融構造における中・小規模企業育成機能の構造的欠落にあると結論づける。

大学出版部ニュース

東海大学出版会

「北欧語文化圏の出版物はこれだから面白い」と書いたのは、大学出版12号91夏号においてであった。それ以来『ムンクの時代』(三木宮彦著・二八八四円)、『デンマーク人の事績』(サクソ・グラマティクス/谷口幸男訳・六六九五円)、『巫女の予言―エッダ詩校訂本』(S・ノルダル/菅原邦城訳・五六六五

円)の三点を刊行することができた。『デンマーク人の事績』はGESTADANORUMの書名で知られたデンマークの古典であり、『巫女の予言―エッダ詩校訂本』も、最も信頼できる校訂本として研究者間で知られたものである。本邦未紹介の古典作品が北欧には多くある。一群の研究者の抬頭により、それらの全貌が現れる日もそう遠くはない。北欧語文化圏の出版物はこれから益々面白い。(M)

東京大学出版会

▼〈新刊〉小林康夫・船曳建夫編『知の技法―東京大学教養学部「基礎演習」テキスト』(A5判二五〇頁、一五四五円)

▼カリキュラム改革が進む東大教養学部で、九三年度から文系一年生の必修科目としてゼミ形式の「基礎演習」が開設された。これは、学問の魅力を紹介し、課題発見や論文の書き方、口頭

発表の仕方等大学での研究に必要な技法を学ぶ画期的授業。

▼本書は、この授業のサブテキスト。第一部は、文系学問の最先端を解説した「学問の行為論―誰のための真理か」。第二部「認識の技術―アクチユアリテイと多様なアプローチ」では、第一線で活躍する一四名の教官が自身の専攻分野がいかに面白いかを具体的にテーマで実証。第三部「表現の技術―他者理解から自己表現へ」で技法を紹介。

東京電機大学出版局

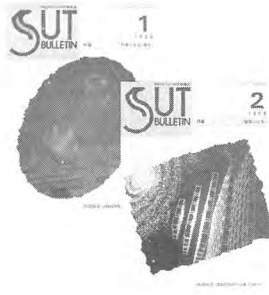
▼新しい教育課程に基づく教育が順次実施され、小局もほぼ五年の歳月をかけた高校用検定教科書が四月から採用となる。

情報化への対応が盛り込まれ、学校へパソコンが導入される一方で、話題となったOAIも言葉だけのブームは去り、最近ではマルチメディアに取って代わられたようである。

大学出版部ニュース

東京理科大学出版会

月刊誌『SUT』は、明日をひらく科学教養誌をキャッチフレーズに、理科大の中堅研究者が中心となって編集しており、科学の新知見・新技術や人間と科学とのかわりなどを、毎月特集記事を中心にわかりやすく紹介している。また、卒業生の業績も多数紹介し、学生にはその進むべき方向に多くの示唆を



与えている。
お得な年間購読（送料当出版会負担）をお奨めします。
年間購読十二冊五一五〇円

東京農業大学出版会

▼『東京農業大学醸造学科と酒づくりのはなし』竹田 正久著
著者は、農大農学部醸造学科長で、醸造微生物学研究室の主任教授である。著者はそのま

がきで『四季に関係なく熟爛、ブランドや酒の種類（純米、本醸造など）を気にしない。また普通酒や糖類添加酒がまざりと思わない。むしろ特徴と変化

があって楽しい。酒は楽しい雰囲気、おいしくなる。私の晩酌哲学である」と語っている。

『醸造学科』は、数多い大学の中で、農大にしかない、ユニークな学科である。その農大の醸造学科の果している役割、又研究室で開発・商品化しているいろんな酒の紹介。そして又酒造技術の進歩は、これまでの『名水・好適米』に関係なく、一般の河川水、普通米でも、質の良いうまい酒がつくれるという。

法政大学出版局

エリック・リード／伊藤 智訳

▼『旅の思想史』三九一四円
：旅はいま私たちの生活に不可欠のものだ。かつて、どの国でもそうだった、というのがアメリカの歴史学者が書いたこの本だ。：放浪する騎士たちの高貴な孤独が個人的自由の概念を育てたこと、科学的探究の旅が世界の客体性と無私の観察者

の視点という近代科学の装置を準備したことなど、幾つもの興味深い考察がなされている。：

——読売新聞・日野啓三氏評
：本書の著者は、文明を産み出したのは旅人なのだと主張する。：文明の急所はすべて、人間が旅立ち、移動し、到着することから始まったのだ、と。：縦横に引用されている昔の旅行記の、主なものだけでも翻訳で揃わないかと思う。：
——日本経済新聞・高橋均氏評

放送大学教育振興会

▼平成六年の新聞は七三三。重版は六五五。放送大学平成六年度の開講科目三〇五点のなかに含まれて、三月には学生の手元に届いた。

▼市販本の売れ行きも好調。新刊書では『幼児教育へ改訂版』（荻原元昭・高橋恵子）、『発達心理学へ改訂版』（野呂 正）、『書誌学・古文書学』（杉浦克



早稲田大学出版部

▼一月より、早大蔵資料影印叢書「洋学篇」第一期全18巻の刊行を開始した。第一回配本は第二巻『前野蘭化集』（定価二八

大学出版部ニュース

己）、『生活学入門』（大久保孝治）、『経済文明論』（坂井素思）、『家族法』（星野英一）、『国際関

係法』（奥脇直也・横山 潤）、『税務と会計』（武田隆一）、『環境アセスメント』（原科幸彦）などは、特に興味と関心を呼んでいる。

▼平成九年以降に「放送衛星BS4」の打ち上げが予定されている。放送大学の実質内容を高めるべく出版部・販売部とも、態勢づくりと準備を開始した。

〇〇〇〇円。三か月ごとに一冊ずつ配本。各巻分売。同「国書篇」第三期全16巻も好評刊行中。

▼叢書「ワセダ・リブリ・ムンデイ」のアメリカ編全3巻、『アメリカの政治』『アメリカの経済』『アメリカの社会』（定価各三〇〇〇円）を刊行した。既刊の

ドイツ編全3巻・フランス編全3巻（定価各二五〇〇円）と合せて、第一期全9巻が完結。各巻分売ですが、この機会にセットでのご購入をお薦めいたします。

明星大学出版部

山田昭廣著 Thomas Greede: Printer to Shakespeare and His Contemporaries

本書は、平成五年度文部省科学研究費の補助によって刊行された書物である。第一部はクリード印刷所の全体像を総合的に考察、親方印刷者クリードに関する事業実績を逐年的に解明、一六〇〇年のロンドン印刷業者

名古屋大学出版会

▼林董一著『近世名古屋商人の研究』（定価一〇三〇〇円）名古屋商人とは何か、名古屋商人はいかに形成されてきたのか？

近江、大坂、江戸の商人とは異なる独自の世界と歴史を、尾張藩公法史に関して画期的業績をあげた著者が、膨大な文書史料を駆使して明らかにする近世名古屋商業史研究の決定版！

たちの地理的考察や、共同印刷の実態を究明している。第二部では、エリザベス時代の戯曲本確立のための規範づくりを分析書誌学的方法によりとらえている。第三部では、補遺のかたちをとった五章からなり、新しい知見と発見の断片を収録してある。

本社ならびに編集課の電話番号が一月より変更になった。〇四二五一九一一九九七九

▼黒田明伸著『中華帝国の構造と世界経済』（定価六一八〇〇円）中華帝国の構造を、現地通貨と地域間決済通貨という概念をテコに析出し、「非均衡型」の市場経済システムを提示した力作。

▼早川幸男著『素粒子から宇宙へー自然の深さを求めてー』（定価二二六六円）人間性への深い理解をもとに科学研究の意義とその進むべき道を論じた評論など、独創的な宇宙線物理学者の足跡を示す科学エッセイ集。

京都大学学術出版会

▼「ウェルギリウス」と聞いて何人の人が彼の業績を思い浮かべることができるだろう。「西洋世界の父」、古典ラテン文学最大の詩人と称されるわりに日本での知名度は、残念ながら低い。この理由について小川正廣氏は「我が国の西洋古典学がギリシア研究に片寄りがちな傾向と無縁ではない。ラテン文学は

大学出版部 ニュース

関西大学出版部

▼大谷憲司著『現代日本出生力分析』（定価四八〇〇円）。日本における「出生力転換」以降の出生行動を人口学的観点から分析。期間有配偶出生率変動の要因と要因とカンタム要因への要因分解、「ひのえうま」をめぐる反応、完結出生力と出生タイミングに対する社会経済的要因の影響などを人口学の最新の理

ギリシア文学の二番煎じだという偏見は、古典の専門家の間でも根強く存在する」と指摘しておられる。しかしウェルギリウスこそ、ギリシア文学からヨーロッパ文学への橋渡しの要であり、西洋を学ぶ人には避けて通れない人物であることが本書によって明らかになり、わが国でのウェルギリウスの評価に地殻変動が起きるのではないか。『ウェルギリウス研究—ローマ詩人の創造』小川正廣著。

論と方法により多変量的に解析する意欲作。▼若森章孝著『資本主義発展の政治経済学』（定価七四〇〇円）。今日のほとんどの経済理論は19世紀ヨーロッパの経験を「典型」とするため、20世紀における資本制システムの世界性や可変性、多様性を説明する理論的努力を怠ってきた。本書はこうした課題に、現代経済学の最前線に位置する世界システム論とレギュラシオン理論の検討を通して応える。

大阪経済法科大学出版部

▼尾崎彦朔著『民族問題の歴史的地位』（仮題）。著者は問う、「なにゆえに人々は、まるでそれが自分たちの救済であるかのように自らの隷属のために戦うのか」(Deleuze et Guattari)米ソ二極支配の終焉によって、パンドラの箱が開いたかのようにナショナリズムが騒がしい。だが、メディアでセンセーショナルに

九州大学出版会

▼沖繩心理学会編『沖繩の人と心』五一五〇円。沖繩心理学会創設二十周年、沖繩祖国復帰二



語られ、知ったような気である我々だが、存外それに対する知識は乏しい。本書はもちろん研究書としてあるが、歴史的な局面に立ち現れるナショナリズムを鋭利に切り取り俎上に乗せ、一般読者にとっても好個の一書となるだろう。各章／国つくりの論理とその逸脱／ナショナリズムとインターナショナルリズム／エトノス・グループとネーション／客入民族としてのナショナル・マイノリティ／人権とナショナル・マイノリティ

十周年を記念して刊行。沖繩研究の総合的な、しかも特色ある基礎的な研究課題を提起している。▼成瀬悟策『心理学はしがき集』二八〇〇円。論文に匹敵する序文や斬新な企画・編集のまえがき、あるいは若手への励ましの推薦文は、これからの新しい心理学研究の方向を示唆している。▼葉隠研究会編『葉隠 HAGAKURE』五〇〇〇円。葉隠の現代的理解を深める国際会議の記録。英文・和文合本。

新刊案内 '94 · 1 \ '94 · 3

(表示価格は税込みです)

■北海道大学図書刊行会

主題と方法—イギリスとアメリカの文学を読む

平 善介編 七二一〇円

植物の自然史—多様性の進化学

岡田 博・植田邦彦・角野康郎編著 三〇九〇円

日本の生産システムと企業社会 鈴木 良始 三九一四円

米流通・管理制度の比較研究—韓国・タイ・日本

白井 晋・三島 徳三編著 三九一四円

大規模稲作地帯の農業再編—展開過程とその帰結

白井 晋編 五九七四円

The Nomadism in China

七戸 長生編 一二三六〇円

北海道の地震 島村 英紀・森谷 武男 一八五四円

水中火山岩—アトラスと用語解説 山岸 宏光 八七五五円

凶説 社会性カリバチの生態と進化 松浦 誠 二〇六〇〇円

憑依と精神病—精神病理学的・文化精神医学的検討 高畑 直彦編著 六三八六円

■聖学院大学出版会

光の子と闇の子 R・ニーバー／武田清子訳 二二〇〇円

■慶應通信

戦略兵器削減交渉 斉藤 直樹 三二〇〇円

現代社会と家族的適応 平野 敏政 三三〇〇円

明治史研究雑纂(手塚豊著作集第十卷) 手塚豊編著 八四〇〇円

自然と対話する魂の軌跡(慶應義塾大学法学研究会叢書別冊)

小名木榮三郎 八〇三四円

二十一世紀における法の課題と法学の使命

慶應義塾大学法学研究会国際シンポジウム委員会 五六六五円

■産能大学出版部

成功企業の全社戦略 中村 元一 二二〇〇円

一ダースなら安くなる

F・B・ギルブレスJr./上野一郎・村主よしえ共訳 二〇〇〇円

売れる話 赤澤 基精 一五〇〇円

素敵な言葉遣い 徳川 桃子 一五〇〇円

リエンジニアリングのための業績評価基準

S・M・フォロニック/アーサーアンダーセン&カン 二五〇〇円

パニー/アーサーアンダーセン・オペレーションナル訳

社長の危機管理 佐藤 忠 二〇〇〇円

営業部門のリエンジニアリング 山口 裕 一五〇〇円

上出来の人生だが…… 森村 稔編著 一六〇〇円

ヘルシー・カンパニー R・ローゼン/宗像恒次監訳 一六〇〇円

出処進退の人間学 藺部 芳郎 一五〇〇円

もうひとつのマールフィーの法則

P・ディクソン/中村則之訳 一五〇〇円

近未来ビジネス戦略

S・デイビス/学習する組織研究会訳 二二〇〇円

天職を見つけ天職に生きる方法 田中 真澄 一五〇〇円

私はこうして中小企業診断士の資格を取得した

中小企業診断士試験研究会編 一五〇〇円

■玉川大学出版部

生きることの発見 新藤 泰男 一五四五円

教師教育の課題—国民教育の再創造のために— 長尾十三二 二四七二円

現代アメリカの大学—ポスト大衆化をめざして—

江原 武一 四九四四円

フレールとその時代 小笠原道雄 三九一四円
 エマソンとその時代 市村 尚久 三二九六円
 学校と大学のパートナーシップ—理論と実践—

シロトニック&グッドラッド編/中留武昭監訳 五六六五円
 籠職人—竹編みの技— 吉羽 和夫 三二九六円
 老いと死—人間形成論的考察— 岡田渥美編 七六二二円
 比較高等教育論—知の世界システムと大学—

アルトバック/馬越徹監訳 四九四四円
 中央大学出版部
 時間と変化の経済学—シナジェティクス入門—
 チャン・ウエイ・ビン/有賀裕二監訳 三九一四円

〈法哲学体系講義〉
 法哲学概説 森末 伸行 二五七五円
 法思想史概説 森末 伸行 二五七五円

■東海大学出版会
 ミクロネシアの海水魚 小林 安雅 二四七二円
 アメリカン・ダイエット H・アンダーソン/鈴木正弘訳 一二三六円

価値 B・アーモンド、B・ウィルソン編/玉井・山本訳 四九四四円
 止まった時計が動きだす 内木 文英 二〇六〇円
 尿沈査アトラス(ヘメディカルアトラス・シリーズ①)

東海大学医学部付属病院中央臨床検査センター編 三六〇五円
 心臓〈超音波診断要覧V〉
 東海大学病院超音波検査室編 六三八六円
 伊藤 嘉昭 二五七五円

生物と社会 基礎数学研究会編 二〇六〇円
 線形代数 氏家 良博 二二六六円
 新版石油地質学概論 太田保世編 一二三六〇円
 睡眠時呼吸障害

アメリカ民主主義と黒人問題 葉山 明 四六三五円
 生命の記号論〈記号学研究⑭〉 日本記号学会編 三〇九〇円
 自然を捨てた日本人 北原貞輔・石井 薫編 二〇六〇円

東海大学50年史 部局篇 東海大学編 五〇〇〇円
 東海大学50年史 通史篇 東海大学編 五〇〇〇円
 障害者に施設は必要か N・クリステイ/立山龍彦訳 二二六六円

レンズ設計—収差係数から自動設計まで 高橋 友刀 三二九六円
 UNIX入門 高橋・田中・金高・嶋村・菊池 二〇六〇円

■東京大学出版会
 アジアから考える3—周縁からの歴史— 溝口・浜下・平石・宮嶋編 三〇九〇円
 ワイマール共和国物語(上・下) 有澤廣巳 各三六〇五円
 日本の教師文化 稲垣忠彦・久富善之編 三七〇八円
 景気循環の理論—現代日本経済の理論— 大瀧雅之 四九四四円
 対立と共存の国際理論—国民国家体系のゆくえ—

山影 進 四五三二円
 東京大学年報 第五卷 東京大学史料研究会編 二四七二〇円
 東京大学年報 第六卷 東京大学史料研究会編 二四七二〇円
 秘密院会議議事録64・昭和篇22 国立公文書館所蔵 一四四二〇円
 帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇46 国立国会図書館所蔵 一二三六〇円

帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇55・56 国立国会図書館所蔵 各一六四八〇円
 論理学 野矢 茂樹 二六七八円
 刑法総論講義〔第2版〕 前田 雅英 三八一一円
 国際法講義Ⅱ—人権・平和— 藤田 久一 四六三五円

難民 加藤 節・宮嶋 喬編 二八八四円
 ガット19条と国際通商法の機能 柳 赫 秀 七〇〇四円
 日本財政要覧〔第4版〕 林 健久・今井勝人編 二六七八円

新刊案内 20

日本における職場の技術・労働史—一八五四—一九〇〇—

山本 潔 一〇三〇〇円

労働組合の職場規制—日本自動車産業の事例研究—

上井 喜彦 五九七四円

社会保障の財源政策

社会保障研究所編 四五三二円
渡辺 定元 五三五六円

樹木社会学

Vegetation in Eastern North America
宮脇 昭・岩槻邦男・M.M.グラントナー編 二八八四〇円

World War II and the Transformation of Business Systems

(International Conference on Business History Vol. 20)
作道 潤・柴 孝夫編 七〇〇四円

枢密院会議事録65・昭和篇23 国立公文書館所蔵 一四四二〇円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇47 国立国会図書館所蔵 一二三六〇円

帝国議会衆議院委員会速記録・昭和篇57・58 国立国会図書館所蔵 各一六四八〇円

The Expanding Universe of English
国立国会図書館所蔵 各一六四八〇円

アジアから考える4—社会と国家—
溝口・浜下・平石・宮嶋編 三〇九〇円

気象の教え方学び方—気象の教室6—
名越利幸・木村竜治 二八八四円
天野 郁夫 一六四八円

大学—変革の時代(U.P.選書二六七)
20世紀の中国—政治変動と国際機構—
宇野重昭・天児 慧編 三二九六円
堀 勝洋 三九一四円
藤井 孝蔵 四五三二円
樋口 陽一 二四七二円
岩井克人・伊藤元重編 三九一四円
脇田 修 四九四四円
辛島 昇編 三九一四円

社会保障法総論
流体力学の数値計算法
近代国民国家の憲法構造
現代の経済理論
日本近世都市史の研究
ドラヴィダの世界—インド入門II—

地球温暖化と海—炭素の循環からさぐる— 野崎義行 二四七二円
がんと生体防御 徳永 徹編 三九一四円
動物分類学の論理—多様性を認識する方法— 馬渡 峻輔 三三九九円

旧約における超越と象徴—解釈学的経験の系譜 関根 清三 八八五八円
The Autobiography of Shibusawa Eiichi—From Peasant to Entrepreneur— 沢沢栄一／テルロ・クレグ訳 三九一四円
Japan's "Guest Workers"—Issues and Public Policies— 島田 晴雄 三七〇八円

Technological Diffusion, Productivity and Employment in Developing Economies 大川一司・大塚勝夫 七〇〇四円
枢密院会議事録66・昭和篇24 国立公文書館所蔵 一四四二〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇48 国立国会図書館所蔵 一二三六〇円

帝国議会衆議院委員会速記録・昭和篇59・60 国立国会図書館所蔵 各一六四八〇円

東京電機大学出版局
アナログ第2・3種端末設備接続技術—工担者受験教室—
蔵内照智／中野幸郎 一九五七円
アナログ／デジタル端末設備接続に関する法規—工担者受験教室—
東京電機大学出版局編 二〇六〇円
マルチメディアと学習活動—マルチ学習カードで学ぶ—
〈教育とコンピュータ〉 後藤忠彦／若山皖一郎 三〇九〇円

図解第二種電気工事士技能試験テキスト 東京電機大学出版局編 一六四八円
初めて学ぶ基礎制御工学 森政弘／小川鑽一 三一九六円
伝送回路〈完全マスター〉 菊地憲太郎 二七八一円
第一種電気工事受験必携 東電学園高等部編 二六七八円
やさしいアナログ回路の実験 白土 義男 二一六三円

システム設計総合演習〈新情報テキスト〉鈴木 洋光 二六七八円
 電気の歴史〈第二版〉直川 一也 二七八一円
 第2種情報処理試験全問題解答集〔94春季版〕二六七八円

■東京農業大学出版会

東京農業大学醸造学科と酒づくりのはなし 竹田正久 一〇〇〇円
 たくましい農業経営者の群像―東京農大OBの挑戦― 一〇〇〇円
 東京農大百周年記念特別企画委員会編 一〇〇〇円

■法政大学出版局

フォークロアの理論―歴史地理的方法を越えて― 二二六六円
 A・ダンデス他／荒木博之編訳
 日本における朝鮮人の文学の歴史―一九四五年まで― 八〇三四円
 任 展 慧

秘めごとの文化史―文明化の過程の神話Ⅱ―

H・P・デュル／藤代幸一・津山拓也訳 五九七四円
 カント解釈の基本問題―その人間学的還元― 藤田 健治 二六二七円
 シンボルとしての樹木―ボッスを例として― M・ルルカー／林 捷 訳 二八八四円

蛸(たこ)―ものと人間の文化史74― 刀禰勇太郎 二九八七円
 社会保障法の基本原理と構造 高藤 昭 五〇九九円
 未来批判―あるいは世界史に対する嫌悪― E・シャルガフ／山本尤・伊藤富雄訳 二八八四円
 ドイツ帝国主義財政史論 鈴木 純義 六一二九円
 寓意と表象・再現 S・J・グリーンブラット編／船倉正憲訳 三九一四円

コペルニクスも変えなかったこと―行動生物学的恋愛論― H・ラボリ／川中子弘・並木治訳 二〇六〇円
 見えるものと見えざるもの M・メルロ＝ポンティ／中島盛夫監訳 六三八六円

イギリスの大学―その歴史と生態― V・H・H・グリーン／安原義仁・成定薫訳 四九四四円
 現象学と形而上学 J・I・L・マリオン他編／三上・重永・檜垣訳 四四二九円
 カント入門講義―『純粹理性批判』読解のために― H・バウムガルトナー／有福孝岳訳 二二六六円
 現代テレコム産業の経済分析―比較経済研究所研究シリーズ9― 法政大学比較経済研究所・永井進編 三二九六円

女性と戦争 J・B・エルシュテイン／小林史子・廣川紀子訳 四四二九円
 ソクラテス裁判 I・F・ストーン／永田康昭訳 四六三五円
 チューリング哲学入門 E・ブロッホ／花田圭介監修／菅谷・今井・三國訳 三九一四円
 曲物(まげもの)―ものと人間の文化史75― 岩井 宏實 二八八四円

哲学(44号)―特集・言語と哲学― 日本哲学会編集 一五四五円
 時代おくれの人間(上) G・アンダース／青木隆嘉訳 四四二九円
 ■放送大学教育振興会(○印はビデオ・ソフト)
 教育社会学 天野郁夫・藤田英典・苅谷剛彦 二〇六〇円
 教育課程 柴田義松編著 一七五〇円
 教育の人間学 和田 修二 一五五〇円
 生徒指導 高野清純編著 一七五〇円
 幼児教育(改訂版) 荻原元昭・高橋恵子編著 二六八〇円
 心理学史 大山 正編著 二一六〇円
 発達心理学(改訂版) 野呂 正編著 二一六〇円
 読む書く話すの発達心理学 内田伸子編著 一八五〇円
 児童の心理と教育(改訂版) 三宅和夫編著 一七五〇円
 老年心理学 荒井保男・星 薫編著 二四七〇円
 人間行動学 中島義明・太田裕彦編著 二一六〇円
 比較思想・東西の自然観 青山昌文編著 二二七〇円

| | | | | | |
|--------------------------|---------------|-------|-------------|---------------|-------|
| 光源氏の世界 | 鈴木日出男 | 二〇六〇円 | 経済文明論 | 坂井 素思 | 一七五〇円 |
| 徒然草の内景―若さと成熟の精神形成― | 島内 裕子 | 二二七〇円 | 日本経済史 | 原 朗 | 二〇六〇円 |
| 現代詩歌 | 野山 嘉正 | 二二七〇円 | 税務と会計 | 武田 隆二 | 二五八〇円 |
| 日本語概論(改訂版) | 古田東朝編著 | 二二七〇円 | 設備管理 | 熊谷 智徳 | 三六一〇円 |
| 書誌学・古文書学―文字と表記の歴史入門― | 杉浦 克己 | 二二七〇円 | 経済・経営統計 | 黒澤 一清 | 五五六〇円 |
| 言語学 | 大江孝男・湯川恭敏 | 二一六〇円 | 生産性科学入門 | 黒澤 一清 | 五六七〇円 |
| ドイツ文学史 | 小澤俊夫編著 | 一九六〇円 | 環境アセスメント | 原科幸彦編著 | 二七八〇円 |
| イギリス文学 | 高松雄一編著 | 二一六〇円 | システム工学 | 平井一正編著 | 一九六〇円 |
| フランス文学 | 塩川徹也編著 | 二〇六〇円 | 微分積分学Ⅰ | 斎藤 正彦 | 一八五〇円 |
| ロシア文学 | 川端香男里・金澤美知子編著 | 二〇六〇円 | 微分幾何 | 小島 守生 | 二五八〇円 |
| 今日の世界文学 | 加藤光也編著 | 一七五〇円 | 物理の世界 | 阿部龍蔵編著 | 二二七〇円 |
| 日本近世史 | 大口勇次郎・高木昭作 | 一八五〇円 | 統計熱力学 | 阿部 龍蔵 | 一八五〇円 |
| 博物館学Ⅰ(改訂版)―多様化する博物館―大塚和義 | 大久保孝治編著 | 二一六〇円 | 物質の科学と技術開発 | 平川曉子編著 | 二六八〇円 |
| 生活学入門 | 平井 聖 | 一七五〇円 | 基礎化学(改訂版) | 平川曉子・市村禎二郎 | 二五八〇円 |
| 生活文化史 | 小木紀之編著 | 一九六〇円 | 物質の科学・化学分析 | 一國雅巳編著 | 二一六〇円 |
| 消費者問題論 | 杉野 正・小池三枝編著 | 二一六〇円 | 物質の科学・有機化学 | 末廣 唯史 | 二二七〇円 |
| 服飾文化論 | 小林彰夫・宮崎基嘉編著 | 一八五〇円 | 生物学概論 | 平本幸男・毛利秀雄編著 | 二二七〇円 |
| 食物と人間 | 本間博文・西村一郎編著 | 二二七〇円 | 人間の生物学 | 新井 康允 | 二五八〇円 |
| 住居学概論 | 鈴木成文編著 | 二二七〇円 | 細胞生物学 | 佐藤英美編著 | 二八八〇円 |
| 現代日本住居論 | 渡邊言夫編著 | 二〇六〇円 | 生態学―生物のくらし― | 藤井宏一編著 | 二一六〇円 |
| 思春期の健康科学 | 鬼頭昭三・仙波純一編著 | 二二七〇円 | 大気と海洋(三訂版) | 奈須紀幸・浅井富雄編著 | 二五八〇円 |
| 脳と生体統御 | 松村祥子編著 | 二二七〇円 | 日本の自然(三訂版) | 奈須紀幸・西川 治編著 | 二八八〇円 |
| 社会保障論―生活者にとつての福祉社会を考える― | 清水浩昭編著 | 二二七〇円 | 英語Ⅲ(94) | 平賀正子・藤井洋子編著 | 二二七〇円 |
| 高齢化と人口問題 | 星野 英一 | 二一六〇円 | 英語Ⅳ(94) | 中田清一編著 | 二九九〇円 |
| 民法 | 星野 英一 | 一九六〇円 | 英語Ⅴ(94) | 山内久明・グレアムロー編著 | 二六八〇円 |
| 家族法 | 星野 英一 | 二〇六〇円 | ドイツ語Ⅰ(三訂版) | 中山 純 | 一七五〇円 |
| 国際関係法 | 奥脇直也・横山 潤編著 | 二〇六〇円 | ドイツ語Ⅱ(改訂版) | 中山 純 | 一七五〇円 |
| 都市社会とコミュニティの社会学 | 似田貝香門 | 一七五〇円 | ドイツ語Ⅲ | 山本 尤 | 二二七〇円 |
| ジュンダーの社会学 | 目黒依子編著 | 二一六〇円 | フランス語Ⅲ(改訂版) | 福井芳男編著 | 三三〇〇円 |
| | | 一七五〇円 | フランス語Ⅳ(改訂版) | 福井芳男編著 | 二〇六〇円 |
| | | | スペイン語Ⅱ(改訂版) | 山口 羔正 | 二〇六〇円 |

〔放送大学ビデオ教材ⅡVHS15巻セット・1巻45分
いずれも定価三〇〇〇〇円〕

- 心理学入門
- 環境の健康科学
- 社会心理学
- 心理測定法
- アメリカの政治
- 文化と社会
- 中国の古典詩
- 日本語の教育とその理論
- ヨーロッパ論Ⅱ
- 力学
- 量子力学
- 生命のしくみ
- 保健体育
- 科学実験法

〔特別講義ビデオ教材ⅡVHS全1巻45分
いずれも定価二〇〇〇〇円〕

- 「新方言」の分布と変化 井上 史雄
- 日系アメリカ人博物館〜日系移民の足跡〜 アケミ・キクムラ
- アメリカにおけるエスニシティ ジョン・ハイアム
- アメリカの日本学 トーマス・ライマー
- 狂言〜笑いの芸術論〜 茂山千五郎
- 琉球芸能の世界 池宮 正治
- アポリジニの現状と未来 ニコラス・ピーターソン
- 分子の世界の右と左 齊藤 喜彦
- 宇宙からの手紙―隕石― 下山 晃
- 神経伝達機構の分子基盤 遠山 正弥
- 身近な薬用植物 難波 恒雄
- 現代建築の構造デザイン 建築構造のメカニズムと造形 川口 衛

○現代建築の構造表現と力学的特徴 中村 恒善
○福祉国家の条件〜近隣居住区計画〜 スウェン・ティールベ
〔教師教育ビデオ教材Ⅱいずれも放送教育開発センター編
印刷教材10冊を含み定価各一九〇〇〇円〕

- 生活科―授業の準備と心がまえ(35分)
- 生活科―授業をふりかえる(35分)
- 生活科―地域協力のある授業例と年間計画(35分)
- 「情報基礎」入門 これがパソコンだ(20分) 定価二〇〇〇円
- 「情報基礎」入門 学習指導要領と実践例(20分) 定価二〇〇〇円

〔高専用ビデオ教材 放送教育開発センター編〕
○新素材 複合材料編 全四巻 定価八〇〇〇円

■明星大学出版部
占領下における教職追放 山本 礼子 二二六九円
Thomas Greede: Printer to Shakespeare and His
Contemporaries 山田 昭廣 一五四五〇円

■早稲田大学出版部
タッチラグビーⅡ―初心者のためのコーチング・プラン― 九〇〇円
新しい中国文学 全6巻
第4巻 黒駿馬 張承志/岸陽子訳 二四〇〇円
第5巻 初恋 池莉/田畑佐和子訳 二六〇〇円
シリーズ 比較家族
第3巻 縁組と女性―家と家のはざままで―
比較家族史学会監修、田中真砂子・大口勇次郎・奥山恭子編 二七〇〇円
叢書 ワセダ・リブリ・ムンディ 第1期/全9巻完結
アメリカの政治―ガリバー国家のジレンマ―
片岡寛光・奥島孝康編 三〇〇〇円

アメリカの経済—世界をリードする原動力—

川辺信雄・原輝史編 三〇〇〇円

アメリカの社会—多様性のなかに統一を求めて—

松尾式之・大西健夫編 三〇〇〇円

大久保山Ⅱ—早稲田大学本庄校地文化財調査報告2—

早稲田大学本庄校地文化財調査室編 一五〇〇〇円

城山遺跡の調査 早稲田大学本庄校地文化財調査室編 一五八〇〇円

早稲田大学蔵資料影印叢書 国書篇第三期 全16巻

第33巻 古代物語隨筆集 中野幸一編 一八〇〇〇円

早稲田大学蔵資料影印叢書 洋学篇第一期 全18巻

第2巻 前野蘭化集 杉本つとむ編 二八〇〇〇円

■名古屋大学出版会

Industrialisation, Urbanisation and Demographic Change in

England 安元 稔 一〇三〇〇円

ポーランド「脱社会主義」への道—体制内改革から体制転換へ—

家本 博一 四一二〇円

岐路に立つ韓国企業経営—新たな国際競争力の強化を求めて—

牧戸孝郎編著 三九一四円

筋感覚—骨格筋からのメッセージ—

伊藤 文雄 八二四〇円

素粒子から宇宙へ—自然の深さを求めて—早川 幸男 二二六六円

世界大不況と国際連盟 藤瀬浩司編 八二四〇円

中華帝国の構造と世界経済 黒田 明伸 六一八〇円

第二次世界大戦の勃発—ヒトラーとドイツ帝国主義—

栗原 優 九二七〇円

液体および溶液の音波物性 野村浩康他 六一八〇円

近世名古屋商人の研究 林 董一 一〇三〇〇円

東海地方の情報と社会 近藤哲生/林 上編 四一二〇円

■京都大学学術出版会

ウェルギリウス研究—ローマ詩人の創造 小川 正廣 六五〇〇円

Coastal Wetlands of Indonesia—Environment, Subsistence and Exploitation 古川 久雄 三二三〇円

ラニガト—ガンダーラ仏教遺跡総合調査 第二冊・図版編 西川幸治編著 一六〇〇〇円

■関西大学出版部

現代日本出生力分析 大谷 憲司 四八〇〇円

カフェハウスの文化史〔普及版〕 小川 悟訳 一五〇〇円

■九州大学出版会

沖繩の人と心 沖繩心理学会編 五一五〇円

貿易理論と経済開発〈佐賀大学経済学会叢書4〉 大矢野栄次 二九八七円

物権変動論の法理的検討〈佐賀大学経済学会叢書5〉 鷹巢 信孝 五九七四円

Proceedings of Joint Conference on Software Engineering 1993 佐護 譽編著 五一五〇円

アジア経済圏の経営と会計 佐護 譽編著 五六六五円

水の造形—水秩序の形成と水環境管理保全— 加藤 仁美 七二一〇円

異文化間教育学序説—移民・在留民の比較教育民族誌的分析— 江淵 一公 七七二五円

三角形イメージ体験法に関する臨床心理学的研究 藤原 勝紀 七七二五円

—その創案と展開— 水崎 博明 七七二五円

哲学・その古代的なるもの

大学出版部協会加盟出版部一覽

| | |
|-------------|---|
| 北海道大学図書刊行会 | 〒060 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX 011-736-8605 |
| 聖学院大学出版会 | 〒362 埼玉県上尾市戸崎1-1 TEL. 048-781-0031 FAX 048-725-0324 |
| 慶應通信 | 〒108 東京都港区三田2-19-30 TEL. 03-3451-3584 FAX 03-3451-3122 |
| 産能大学出版部 | 〒152 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘サンビル TEL. 03-3724-9101 FAX 03-3717-4346 |
| 玉川大学出版部 | 〒194 東京都町田市玉川学園6-1-1 TEL. 0427-39-8935 FAX 0427-39-8940 |
| 中央大学出版部 | 〒192-03 東京都八王子市東中野742-1 TEL. 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354 |
| 東海大学出版会 | 〒151 東京都渋谷区富ヶ谷2-28-4 TEL. 03-5478-0891 FAX 03-5478-0870 |
| 東京大学出版会 | 〒113 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958 |
| 東京電機大学出版局 | 〒101 東京都千代田区神田錦町2-2 TEL. 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563 |
| 東京農業大学出版会 | 〒156 東京都世田谷区桜丘1-1-1 TEL. 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643 |
| 東京理科大学出版会 | 〒162 東京都新宿区若宮町19 TEL. 03-3235-5692 FAX 03-3235-9632 |
| 法政大学出版局 | 〒162 東京都新宿区市谷田町2-14-1 TEL. 03-5228-6271 FAX 03-5228-6010 |
| 放送大学教育振興会 | 〒105 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482 |
| 明星大学出版部 | 〒191 東京都日野市程久保2-1-1 TEL. 0425-91-9979 FAX 0425-93-0192 |
| 早稲田大学出版部 | 〒169 東京都新宿区戸塚町1-103 TEL. 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406 |
| 名古屋大学出版会 | 〒464-01 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX 052-781-0697 |
| 京都大学学術出版会 | 〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX 075-761-6182 |
| 大阪経済法科大学出版部 | 〒581 大阪府八尾市楽音寺6-10 TEL. 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979 |
| 関西大学出版部 | 〒564 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL. 06-388-1121 FAX 06-389-5162 |
| 九州大学出版会 | 〒812 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX 092-641-0172 |